

## カゾット『悪魔の恋』の結末

赤 松 頌 也

### 1. はじめに

『悪魔の恋』は、いわゆる「幻想小説」の研究者たちによって言及されているように、悪魔との交流や魔法が描かれる物語の先駆的存在として紹介されることが多く、またその出版年の早さからフランスにおける幻想小説の嚆矢であるとも言われている。このジャンルの定義を確立しようとした研究者は多く、その中でも「悪魔」や「吸血鬼」といった題材に注目した人物として、ルイ・ヴァックスの名を挙げることができるだろう。このように、小説のある側面のみに着目し、そこから自分の定義を展開しようとしたのは、なにも彼だけではない。多くの者がそのようにしたし、とりわけ後世の研究者に引用されることになるトドロフでさえも同じことをしているのである。そして、形こそ違えど、みな一様にカゾットによるこの物語を各々の論に取り入れているのだが、彼らのように『悪魔の恋』を「幻想小説」という範疇に納める形では読もうとしない（我々のような）読者——つまり、「幻想小説」とはいかなるものであるかを意識することのない読者——は、この物語を読み終えたとき、ジャクソンの「目録化」<sup>1)</sup>やトドロフの「ためらい」といったことよりも、もっと単純なことが気になっているはずなのである。

実は、この物語は、「悪魔」から逃れて実家へと戻った主人公アルヴァーレが母親と再会することで今まで自分が犯した過ちに気づき、加えて、ある学者によって説教されることでその幕を閉じているのだが、その説教に対する彼の感想や、その後の展開は一切描かれていないのである。そのため、我々読者は読後に次のような疑問を抱くことになる。「結局、アルヴァーレは悪魔から解放されたのだろうか、それとも解放されなかったのだろうか。そして彼自身は自分が体験した出来事をどのように考えているのだろうか。」この疑問こそ我々読者が気にすべき単純なことがらなのであり、自らの手でその答えを出さなければならない問題なのである。そこで我々はテキストを注視する。そうすることで、我々は作者によって作品内に散りばめられたさまざまな「たくらみ」を一つ一つ見つけ出すことができるだろう。作中で主人公アルヴァーレが悪魔に騙されていたように、カゾットは様々な手を使い読み手を翻弄しようと画策している。彼の「たくらみ」を見抜き、上の疑問に答えようと試みること、それこそが本稿の目的である。

## 2. 1. 「危険な気持」

ナポリ王の親衛隊付の大尉であった青年アルヴァーレがこの物語の主人公である。語り手でもある彼が自分の体験した過去の出来事を回想しているのだが、その「出来事」は、ある人物との出会いから始まる。その人物の名はソベラーノといい、アルヴァーレは兵営での議論を通じて彼と知り合いになる。そして、彼こそがアルヴァーレに「降霊術 Cabale」の手ほどきをする人物なのである。ソベラーノに魅了され、弟子となることを決意した彼は、ソベラーノの一行と共にポルティチの廃墟へと足を踏み入れる。彼らに連れられるかたちで目的地へとたどり着いたアルヴァーレは、ソベラーノの教えに従い「ベエルゼビュート Béelzébut」<sup>2)</sup>と三回唱える。すると、彼の前に駱駝の首が姿を現わすのである。その駱駝はアルヴァーレの命令に従う形で犬になり、その後「小姓 un page」へと姿を変える。ナポリの自室へ帰宅した後、小姓の願いもあって彼らは一緒に生活することになるのだが、アルヴァーレは男であるはずのこの「小姓」に対して「ある感情」を抱いてしまうのである。

“Ah! Biondetta, disois-je, si vous n’étiez pas un être fantastique! si vous n’étiez pas ce vilain dromadaire!

‘Mais à quel mouvement me laissai-je emporter? J’ai triomphé de la frayeur: déracinons un sentiment plus dangereux. Quelle douceur puis-je en attendre? Ne tiendrait-il pas toujours de son origine?’

‘Le feu de ses regards si touchans, si doux, est un cruel poison. Cette bouche si bien formée, si colorée, si fraîche & en apparence si naïve, ne s’ouvre que pour des impostures. Ce cœur, si c’en étoit un, ne s’échaufferoit que pour une trahison”.

[L. D. A., p. 24]

この場面で、彼は初めて「ビヨンデッタ Biondetta」<sup>2)</sup>と小姓に呼びかける。今までは「ビヨンデット Biondetto」だったのだ。そして本文の30頁を境に、アルヴァーレは二度と「ビヨンデット」と呼ばなくなる。その時から、彼は小姓のことを「女性」として見なしていたのだろう。上記の引用からもまた、我々は、アルヴァーレが小姓の異様なまでの「美しさ」に惹かれてしまっている様子を知ることができる。さらに彼は「僕は恐怖には打ち勝ったが、それよりも危険な気持を根絶やしにせねばなるまい」とまで告白しているのだ。「恐怖 la frayeur」とは彼が小姓ビヨンデッタを呼び出した際に感じたものだろう。ビヨンデッタは最初、醜悪な駱駝の

首の姿で彼の前に現われたのだ。では、その恐怖に打ち勝った彼を脅かす「危険な気持 *un sentiment plus dangereux*」とは一体なんだろうか。実はアルヴァーレのこの感情を利用して、ビヨンデッタは彼を自分のものにしようとするのである。

## 2.2. 肉体関係

物語の後半部では、アルヴァーレがビヨンデッタを結婚相手として紹介するために、母親の暮らすエストラマドゥーレへと二人して旅立つ道程が描かれている。その旅路の途中で、彼らはマルコスという名の農夫に部屋を借りることになるのだが、その夜、部屋でビヨンデッタと二人きりになったアルヴァーレは彼女に「ある決意」を聞かされる。今まで散々エストラマドゥーレへ行きたくないと言っていた彼女は、一転して彼の実家へと向うことを涙ながらに承諾し、「ある行動」に出るのである。

O pouvoir des larmes! c'est sans doute le plus puissant de tous les traits de l'amour! Mes défiances, mes résolutions, mes sermens, tout est oublié. En voulant tarir la source de cette rosée précieuse, je me suis trop approché de cette bouche où la fraîcheur se réunit au doux parfum de la rose ; & si je voulois m'en éloigner, deux bras dont je ne sçaurois peindre la blancheur, la douceur & la forme sont des liens dont il me devient impossible de me dégager.

.....

« O mon Alvare! s'écrie Biondetta, j'ai triomphé : je suis le plus heureux de tous les êtres »

Je n'avois pas la force de parler : j'éprouvois un trouble extraordinaire ; je dirai plus : j'étois honteux, immobile. Elle se précipite à bas du lit : elle est à mes genoux, elle me déchausse. <sup>3)</sup> « Quoi! chère Biondetta! m'écriai-je, quoi! vous vous abaissez...? -Ah! répond-elle, ingrat, je te servois lorsque tu n'étois que mon despote : laisse-moi servir mon amant ».

[L. D. A., pp. 77-78]

「美しい二本の腕が、固い絆となって、私は身を振り解くことができなくなりました」「私は、口をきく元気はありませんでした」これらの表現に注目することで、「あること」が推測される。詳しい記述はアルヴァーレによって避けられているが、恐らく二人はここで初めて体の関係を持ったのである。アルヴァーレに *vous* を使っていたビヨンデッタが、ここでは彼のことを *tu* と呼んでいるのだ。また、もし二

人が口づけを交わしたに過ぎないとするなら、ことが終わった後にアルヴァーレが「恥ずかしさ honteux」を感じる必要はない。彼らはマルコスに部屋を借りるよりもずっと前に、キスを済ませているのである。アルヴァーレがビヨンデッタに感じた「危険な気持」とは彼女に対する「肉体的な欲望」、つまり「性欲」だったのだ。

### 3. ベエルゼビュート

アルヴァーレはついにビヨンデッタに「身をささげ」た。しかし彼女の要求はこれで終るわけではない。最初の望みを叶えたビヨンデッタは彼にさらなる要求をするのである。

-O ma chère Biondettal lui dis-je, quoiqu'en faisant un peu d'effort sur moi-même, tu me suffis : tu remplis tous les vœux de mon cœur...

-Non, non répliqua-t-elle vivement, Biondetta ne doit pas te suffire : ce n'est pas là mon nom ; tu me l'avois donné : il me flattoit, je le portois avec plaisir ; mais il faut bien que tu saches qui je suis... Je suis le Diable, mon cher Alvare, je suis le Diable... ».

[L. D. A., pp. 78-79]

「ビヨンデッタでは、あなたにまだ足りませんわ。それはあたしの名じゃございませんもの」と彼女自身が語っているように、「私の可愛いビヨンデッタ *ma chère Biondetta*」という科白はどうやら彼女を納得させることのできるものではなかったようだ。<sup>4)</sup> また、上記の引用文の後に、ビヨンデッタは「勿論、多少の技巧を要しましたが、そのお陰で最初の満足を得ました Sans doute, je dois à quelques artifices la première complaisance」と言っているが、この「最初の満足」とは、この場面よりもだいぶ前にアルヴァーレが小姓の要求通りに口にした科白「ただ、俺のために、ただ俺ひとりのために、ある肉体に結びついた精霊よ、お前が家来であることを許し、お前に私の保護を与えてやる *Esprit qui ne t'es lié à un corps que pour moi & pour moi seul, j'accepte ton vasselage & t'accorde ma protection*」を彼に言ってもらったことを指していると思われる。<sup>5)</sup> だがこの科白でさえ、彼女を本当に納得させるには不十分だったのである。それは「私の可愛いビヨンデッタ」が却下された理由と同じだ。つまり、「精霊 *Esprit*」もまた「あたしの名 *mon nom*」ではなかったからである。上の引用に続く場面を見てみよう。

« Laisse couler dans tes veines un peu de cette flamme délicieuse

par qui les miennes sont embrasées ; adoucis, si tu le peux, le son de cette voix si propre à inspirer de l'amour & dont tu ne te sers que trop pour effrayer mon âme timide ; dis-moi enfin, s'il t'est possible, mais aussi tendrement que je l'éprouve pour toi : *Mon cher Béelzébut, je t'adore...* ».

A ce nom fatal, quoique si tendrement prononcé, une frayeur mortelle me saisit ; l'étonnement, la stupeur accablent mon âme : je la croirois anéantie si la voix sourde du remords ne crioit pas au fond de mon cœur. Cependant, la révolte de mes sens subsiste d'autant plus impérieusement qu'elle ne peut être réprimée par la raison. Elle me livre sans défense à mon ennemi : il en abuse & me rend aisément sa conquête.

Il ne me donne pas le temps de revenir à moi, de réfléchir sur la faute dont il est beaucoup plus l'auteur que le complice. « Nos affaires sont arrangées, me dit-il, sans altérer sensiblement ce ton de voix auquel il m'avoit habitué.

[L. D. A., pp. 79-80]

実は、アルヴァーレはとうの昔にビヨンデッタの本当の名前を知っていたのだ。彼はポルティチの廃墟で、「ベエルゼビュート」と三回呼び駱駝の首を呼び出したのである。彼女の本名は「ベエルゼビュート」なのだ。そして、この本名が含まれた科白は、上の引用にある『僕の可愛いベエルゼビュート（悪魔）、僕は君を愛する *Mon cher Béelzébut, je t'adore...*』しかない。彼女はこの科白をアルヴァーレに言わせたかったのである。

アルヴァーレによってまたもや詳細は省かれているが、彼は悪魔の要求どおり例の科白を口にしたと我々は考えている。彼がそう口にしたからこそ「無抵抗に私は敵に引き渡されました。敵は、それをよいことにして、わけなく私を征服してしまいました」<sup>6)</sup> という一文があるのだ。「悪魔ベエルゼビュート」であると認めた上で彼女を愛した彼は、「悪魔」によって「征服」され、「悪魔」と「切っても切れぬ indissoluble」関係となってしまったのである。

#### 4. ドン・ケブラキュエルノス

永遠の愛を約束させ、肉体関係まで結ぶことに成功した悪魔ベエルゼビュート（ビヨンデッタ）は安心したのか、先ほど引用した場面の直後、アルヴァーレの眼前に自身の真の姿をさらす。その正体は駱駝の首であった。それを改めて目撃したアルヴァーレは、恐怖のあまり寝台の下に隠れ、眼を閉じることで「悪魔」をやり過ご

そうとする。暫くしてそこにやってきたマルコスによって、彼は自分が十四時間も眠っていたこと、さらにはビヨンデッタが先に出発したことを教えられるのだが、「母が危篤に陥っている筈だ」という考えまでが、ほんのかすかにしか思い出せない」ほど錯乱していた彼は、何故か先に出発した悪魔のもとへとその足を向けるのである。しかしそこに悪魔はいない。ベエルゼビュートはこれ以降、アルヴァーレの前からも、読者の前からもその姿を消してしまうのである。

ようやく母の存在を思い出し、実家へとたどり着いた彼は、つい先日出会ったベルト（アルヴァーレの乳母の妹）に危篤だと聞かされていた彼女が元気であることに安心する。しかも、母親ドニャ・メンチャの証言によって、ベルトが暫く前から病気で床にふせっていること、さらには、妖術師として自分の兄に裁判にかけられることもない、ということが判明するのである。このように、ビヨンデッタに教えられていたことと「現実」の矛盾<sup>7)</sup>を知った彼は、自分の身に起きた一切の出来事を母親に語る決心をする。彼のただならぬ様子に懸念をおぼえた彼女は、高名な「学者 docteur」であり、彼女が信頼をおいているドン・クエブラキユエルノスなる人物を呼ぶ。学者にアルヴァーレを説教してもらおうというのだ。この物語の最後を飾る説教の、それも最後の部分を引用する。

« Croyez-moi : formez des liens légitimes avec une personne du sexe ; que votre respectable mère préside à votre choix ; &, dût celle que vous tiendrez de sa main avoir des grâces & des talents célestes, vous ne serez jamais tenté de la prendre pour le Diable ».

[L. D. A., p. 87]

以上が学者の説教の最終部に当たるのだが、我々にはどうしてもこの学者による説教がアルヴァーレにとって何かしらの役に立つものであるようには思えないのである。その内容のほとんどは彼が今まで自分自身に問い詰めてきた内容と少しも変わらないのだ。しかも、母の教えに従うことが悪魔から救われる何よりの方法だ、と学者は彼に告げてさえいる。つまり、すべての責任を母親に任せてしまっているのだ。これではなんのために呼ばれたのか判ったものではない。しかしながら、上の引用にあるように、アルヴァーレの結婚についてだけははっきりと彼に意見を述べているのである。

結婚相手を選ぶ際には母親の意見を参考にすること。わざわざ説教の最後に、それも物語の最後に「結婚相手を、悪魔だなどとお考えになるような気には決してしないでください」といった科白を、学者——あるいは、作者——は付け加え

るようにして配置している。確かに、この学者は彼の母親と懇意なのだから、普段から息子の結婚について彼女が相談していたとしてもなんら不思議はない。アルヴァーレがビヨンデッタを母親に紹介しようとしたのも、母が自分の結婚を強く望んでいたことを知っていたからである。だがそれでも、この一見当然と思われる彼の説教の締めくくり方に、何かしらの違和感を感じるのは、我々だけではないだろう。アルヴァーレは母親と再会する直前に、次のように一人ごちているのだ。

‘Eh! qui m’y délivrera des chimères engendrées dans mon cerveau? Prenons l’état ecclésiastique. Sexe charmant, il faut que je renonce à vous: une larve infernale s’est revêtue de toutes les grâces dont j’étois idolâtre; ce que je verrois en vous de plus touchant me rappellerait...’

[L. D. A., p. 83]

アルヴァーレのこの独白は、マルコスが教えてくれた村に先に出発したはずのビヨンデッタがいないことを彼が知ったとき、その口から吐き出されたものである。母を危篤へと追いやってしまったことに対する後悔と懺悔の気持ちがにじみ出ているのがわかるだろう。彼はここで、いささか極端ではあるが、将来聖職者になることを誓っている。聖職者になるということは妻を持たない、つまり生涯結婚しないということである。彼は「美しい女性たちよ、私の心を一番打つものを、君たちのなかに見る度毎に、想い出すだろう、あの……」とあるように、将来の結婚相手にビヨンデッタの面影を見てしまうことを恐れていたのである。

我々読者以外には誰にも語られることのなかったこのアルヴァーレの告白は、なぜかあの学者の最後の科白と呼応している。彼はこの考えを口に出したわけではなく、心の中で唱えていたはずなのだ。ようやく再会を果たした母親に、アルヴァーレがここまであけっぴろげに自身の悩みを打ち明けていたとは思えない。だからこそ彼の懊悩は学者に伝わるはずがないのである。しかしながら、自身の無力さを知るはずの学者ドン・クェブラキユエルノスは、この件に関しては彼に対して的確な忠告を施している。彼はなぜアルヴァーレの苦悩を知ることができたのだろうか。ここで思い出すべきは、ビヨンデッタが彼の前にその真の姿を見せてから姿を消しているということである。「悪魔」はことあるごとにアルヴァーレの先回りをして彼を罠にかけてきた。以上のことから考えると、いささか論を急ぎすぎかもしれないが、アルヴァーレと我々読者しか知らないはずの彼の悩みを知っていたこの学者は「悪魔」の手先であるかもしれないのだ。すると先ほどの学者の「忠告」は次のように解釈されうるのである。今後アルヴァーレの結婚相手として紹介される女性

は、今や彼の前から姿を消したはずの悪魔ビヨンデッタ＝ベエルゼビュートである、と。「悪魔」はアルヴァーレの婚約者として再度姿を現わすことで、彼だけでなく、彼の母親にも認めてもらう方法を思いついたのである。

ここでようやく冒頭で取り上げた「結局、アルヴァーレは悪魔から解放されたのだろうか、それとも解放されなかったのだろうか」という疑問に答えることができる。アルヴァーレは、ビヨンデッタの美しさに魅了され、肉体関係を持ち、なおかつ自分が関係を持った相手が悪魔ベエルゼビュートであることを認めたのであった。また、将来、彼のもとへ結婚相手としてやってくる女性が「悪魔」である可能性についても我々は検討した。以上の内容から、アルヴァーレはこの物語を振り返って語っている「現在」においても「悪魔」から解放されてはいない、と解釈する方が、彼が学者の説教にて「悪魔」から解放されたとするよりも、この物語にとって適切な解答であるように我々には思えるのである。しかしながら、事態はそう簡単ではない。我々が本稿によって解決すべき疑問にはまだ続きがあった。「彼自身は自分が体験した出来事をどのように考えているのだろうか。」この疑問を解決すること、それは今までの考察の根幹に関わる問題へと発展するのである。

## 5. ビヨンデットとビヨンデッタ

ところで、『悪魔の恋』はアルヴァーレの回想の物語であった。回想ということは、この物語の主人公は、「現在」の地点から自分が過去に体験した出来事を語っている、ということになるだろう。そしてその有様はテキストにそのまま現われているはずなのだ。そこで、実際に「現在」の彼が顔を出す場面を引用してみよう。アルヴァーレはビヨンデッタと一緒にナポリからヴェネツィヤへと向うために馬車で移動するのだが、彼はその馬車の中で異様な眠気に襲われるのである。

Il fut d'ailleurs très-long, & ma mère, par la suite, réfléchissant un jour sur mes aventures, prétendit que cet assoupissement n'avoit pas été naturel.

[L. D. A., p. 29]

彼の「現在」が垣間見える場面ではあるが、ここではアルヴァーレの母親の意見が述べられているに過ぎない。彼自身がこの「まどろみ」についてどう考えていたのかは知ることはできないし、上記の内容だけでは、彼が現在どのような状況にあるのかもまた読者である我々にはうかがい知ることはできないのである。しかし、我々は、このようにあからさまな形で姿を現わすアルヴァーレを探そうとしないでも、現在の彼の様子を知ることができるのだ。なぜなら、回想者である現在の彼の「感



情」がテキストの至るところに散見されるからである。そして、その感情の表れ方如何を検討することによって、ビヨンデッタとの一連の出来事に対する現在のアルヴァーレの姿勢もまた明らかになるはずなのだ。

まずは、ポルティチの廃墟での出来事を取り上げることにする。第2節で述べたように、その廃墟にて駱駝の口から吐き出された一匹のスパニエル犬は、アルヴァーレの赦しを乞うかのように、彼の目の前で「仰向け」に寝たのであった。その様子を見て、彼はこの犬が「牝犬 *la petite chienne*」であることがわかったと語っている。しかしその数行後、アルヴァーレは同じ犬のことを「雄犬 *le chien*」と表現するのである。また、似たような事例として、ビヨンデットとビヨンデッタの例を挙げることができるだろう。既に取り上げた場面ではあるが、彼は小姓に声を掛ける際に、この二つの名前を使い分けていたのであった。しかし、彼には小姓の性別を迷ってはいけない理由がある。我々の考察では、アルヴァーレはビヨンデッタと肉体関係を結んでいるはずだからだ。小姓は女でなければならないのである。それなのにこの物語を回想している——つまり、過去の出来事を思い出している——現在の彼はその性別を断定することなく、この二つの名前を使い分けている。この物語を語っているアルヴァーレは一体何を考えているのだろうか。

恐らく彼はいまだに自分が体験した出来事について確信、つまり実際に体験したという感覚が持てないでいるのである。彼自身もまた次のように述懐している。

Tout ceci me paraît un songe, me disois-je ; mais la vie humaine est-elle autre chose? Je rêve plus extraordinairement qu'un autre, & voilà tout.

[*L. D. A.*, p. 50]

アルヴァーレはここで、自分が体験した出来事は夢なのではないかと疑っている。しかも、彼は再会した母親に「悪い夢を見ていたのだ」と諭されてさえいるのである。事実、そういった夢を見せる悪魔もいると言われている。アルヴァーレのビヨンデッタとの関係は彼の夢なのかもしれないのである。

ここに我々が駱駝の首やビヨンデッタを“悪魔”であると断言することのできない理由があるのだ。この物語はアルヴァーレの回想の物語であることから、彼は自分の物語を自由に語ることができると同時に、自在にその内容を偽ることもできるのである。実際、彼はビヨンデッタとの性行為に関する記述を意図的にはぐらそうとするきらいがあったのであり、我々はその点を考察したのだった。そしてまた、テキストに見られるビヨンデッタとビヨンデット、牝犬と雄犬を代表とする性別のぶれは、彼の「現在」の状態を正確に伝えるものである。アルヴァーレはこの物語

を語っている「現在」も自分が経験した出来事が一体どういうものであったのかうまく説明できない状況にいたのであり、そのためらいがテキストに表れているのだ。つまり、あれはビヨンデットだったのか、ビヨンデッタだったのか、それともベエルゼビュートだったのか、彼は「現在」もまだ悶々と悩み続けているのである。その意味で、アルヴァーレはまだ「悪魔」の呪縛から逃れることができないでいるのだ。

だがもしアルヴァーレの体験が彼の言うように本当に夢であったとすると、今までの考察に大きな影響が出ることになる。「悪魔」の存在はまさに彼一人の頭の中で繰り広げられた妄想にすぎず、また、彼の物語が彼自身の妄想ではないとする決定的な証拠もないとすれば、『悪魔の恋』は「アルヴァーレが悪魔から解放されるか、されないか」が焦点となる物語ではなくなってしまうのである。彼自身、駱駝の首から吐き出された犬が雄犬なのか牝犬なのか、ビヨンデッタなのかビヨンデットなのか、それとも悪魔ベエルゼビュートなのか、自分が呼び出したものが一体何者であったのか「現在」もなお答えを出せないでいる。なおかつ、語られたその経験さえ彼の妄想であって実際に体験したものではないのかもしれないとすれば、この物語における「悪魔」の存在さえ疑わしいものとなるのである。であるからこそ、先ほどのように「アルヴァーレは現在においても悪魔から解放されていない」と断言することは不可能となるのだ。

## 6. まとめ

第4節で、我々は『悪魔の恋』を「アルヴァーレが悪魔から解放される物語」とするよりも「アルヴァーレが悪魔から解放されない物語」と見なす方向に傾いていた。しかしながら、第5節における考察の結果、どちらか一方の読み方が正しいと断言することは不可能であることが判明したのだが、これこそが作者カゾットの狙いだったのである。つまり、この作品には二通りの読み方が許されているのだ。恐らく、『悪魔の恋』のように一つの作品内に二通りの読みの可能性を盛り込んだ作品は、当時にしてはめずらしい構造の小説であったと思われる。だからこそ、自らも「幻想小説」の書き手であるネルヴァルはその著書『幻視者』の中でこの物語を絶賛し、このジャンルの研究者であるトドロフは『幻想文学論序説』において、幻想文学の定義付けの章の「冒頭」でこの小説を取り上げたのだろう。『悪魔の恋』は小説の可能性に満ちた「近代的な」小説だったのである。

## 注

- 1) ローズマリー・ジャクソンは、トドロフ以前のフランスの批評家たち (P.-G. カステックス、マルセル・シュネデール、ルイ・バックス、そしてロジェ・カイ

ヨワ)の研究方法を、いわゆる「幻想小説」によく見られる主題や動機を「目録化 cataloguing」したにすぎない、と批判している。Rosemary Jackson, *Fantasy, The Literature of Subversion*, Routledge, 2003 (first published 1981). p. 5

- 2) ビヨンデッタはビヨンデットの女性形である。
- 3) アルヴァーレが初めて「小姓」を自分の部屋に招いた時、着物を脱ぐために寝室に入ろうとした彼は、「小姓」に「お手伝いしましょうか Vous aiderai-je?」と声を掛けられている。この誘いにアルヴァーレは「いや、僕は軍人だ。自分のことは自分です Non, je suis militaire & me sers moi-même」と言って断るのである。しかし、この場面では、アルヴァーレはビヨンデッタに服を脱がされることに抵抗していない。それだけ彼は彼女に心を許しているのである。
- 4) 「ビヨンデッタ」と「ベエルゼビュート」の違いについてより詳しく考察する。わかりやすい違いとしては、「ビヨンデッタ」が人間の女の名称であるのに対して、「ベエルゼビュート」とは悪魔の名前であることを挙げることができるだろう。さらに、その表記の変化に注目したい。ma chère Biondetta の ma に対して、mon cher Béelzébuth の mon。ビヨンデッタは「女」であるが、ベエルゼビュートは「男」なのである。冒頭の一節に「財布の続く限り女遊びや賭博にふけていた」とあるように、アルヴァーレはホモセクシャルではない。だからこそ彼は、ビヨンデッタのことを元は醜悪な怪物であるか、小姓（男）であることを意識し、ビヨンデッタの魅力から逃れようとしていたのである。そのアルヴァーレが「男」と肉体関係を結んだのかもしれないのだ。そのために、彼は「この宿命的な名前 ce nom fatal」を聞き、「死ぬほどの恐怖 une frayeur mortelle」に駆られたのである。
- 5) あるいは、アルヴァーレと肉体関係を結んだことを指していると思われる。
- 6) ここでもまたアルヴァーレによって事実は隠蔽されているが、彼は二度悪魔と肉体関係を結んだ可能性がある。一度目は先ほど考察を加えた場面で行われているはずであり、悪魔がベエルゼビュートという本名を名乗る前の出来事であった。しかし、「二度目の時は、あたしは、ちゃんと名を名乗っていました。あなたは誰に身を任せるのか知っていましたし、あたしもあなたの無智につけこむ気はありませんでした quant à la seconde, je m'étois nommé ; tu sçavois à qui tu te livrais, & ne sçauois te prévaloir de ton ignorance」とベエルゼビュートは告白している。この言葉を信じるならば、彼は彼女の本名を知った「後」に、もう一度「行為」に及んでいるはずなのである。するとこうは考えられないだろうか。「私の感覚の反逆は、理性によって抑えつけられないだけに、一層激しく続けられました la révolte de mes sens subsiste d'autant plus impérieusement qu'elle ne

peut être réprimée par la raison」とは、いわゆる「勃起」を意味し、「敵が共犯というよりも張本人になっている罪業 la faute dont il est beaucoup plus l'auteur que le complice」とは「性行為」であると。つまり、アルヴァーレが「無抵抗に敵に引き渡され」、「征服」されたとする一文は、『僕の可愛いベエルゼビュート（悪魔）、僕は君を愛する *Mon cher Béelzébut, je t'adore...*』と彼が言ってしまったこと、さらには彼がベエルゼビュートと行為に及んだということ、この二つの内容を同時に指し示すものであると思われる。

- 7) アルヴァーレは妖術師として裁判にかけられることから逃れるために、ナポリを離れヴェネツィヤへと旅立ったのだった。そして、そのように彼に吹きこんだのはビヨンデッタなのである。

### 引用・参考文献

本文中の引用文の後の略号 [L. D. A.] で示された出典は以下のものである。

L. D. A. : Jacques CAZOTTE, *Le diable amoureux*, Édition critique par Yves Giraud, Honoré Champion, 2003.

ジャック・カゾット『悪魔の恋』、渡辺一夫・平岡昇訳、国書刊行会、1976年。両氏の訳を参考として、一部変更した箇所がある。